

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 30 日現在

機関番号：11301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2017

課題番号：26580009

研究課題名(和文)現代日本における「死のケア」のための異分野融合研究

研究課題名(英文) Interdisciplinary Research for the "Care for Dying" in Contemporary Japan

研究代表者

鈴木 岩弓 (SUZUKI, IWAYUMI)

東北大学・文学研究科・名誉教授

研究者番号：50154521

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、超高齢多死社会の現代日本における「死」への対処を、現場に即した「ケア」のあり方に注目して検討した。その際にはとりわけ、人文社会科学的基盤に立つメンバーと、看護学的基盤に立つメンバーの異なるディシプリンによる観点の違いに留意し、その点の相互理解をする中から、「死のケア」への新たな道実現の要点を考察した。

本研究の成果報告書として、『現代日本における『死のケア』のための異分野融合研究』(総頁数112)を刊行した。

研究成果の概要(英文)： In this research, we examined how to cope with "death" by paying attention to the way of "care" conforming to the situation of "death" in contemporary Japan of a hyper-aged and multi-death society. In doing so, we took note of differences in viewpoints due to disciplines between members of humanities and members of nursing. From the mutual understanding of that point, we examined the key points of realizing a new path to "care for dying".

As a result report of this research, Interdisciplinary research for "care for dying" in contemporary Japan" (pp.112) was published.

研究分野：宗教学

キーワード：死 死のケア 死生観 グリーフケア ターミナルケア 死者観念 身体観 看取り

1. 研究開始当初の背景

「死」をめぐる種々の問題は、これまでも様々な学問領域で議論されており、「死生学研究」という大きな枠組みも形成されている。「死」と「ケア」との関係では、「どのように死を迎えるか」(デスエデュケーション)、「どのように患者や家族を死へ送るか」(ターミナルケア)、「どのように親しい人の死を乗り越えるか、また、どのように遺族をサポートできるか」(グリーンワーク/グリーンケア)という視点から、身体的ケアに止まらず、それぞれの場面における「死」に対峙する態度も考察されてきている。しかし、こうした「死」をめぐる研究は人称性・主体性が曖昧なまま進められてきた感もある。一方、「死」の場面に直面する人々にとっては、「人称の明確化」は看過できない問題である。というのも、他人(あなた)の「死」を通じて「死」に対峙しているのは、常に自分(わたし)なのである。よって、わたし中心の「死」との向き合い方も議論されなければならない。

また欧米の学術理論の影響を受けて進展してきた死生学研究においては、「心」と「身」の問題が切り分けられて分析されることもある。実際の現場の問題としては、「看護される身体」や、「死に逝く身体」(死体)、「遺された身体」(遺体)と、それぞれの身体の人格に関わる問題には対応しきれていない点があることも指摘できる。「死」をめぐる場面では、死ぬ人物と遺される人物という「当事者」が、意識の志向性によって異なる。「死」を考える上では、誰の、どの場面での「死」なのかを明確にすることが不可欠である。

2. 研究の目的

本研究は現代日本における「死」をめぐる「ケア」に焦点を置き、人文科学の諸分野での研究を「ケア」の現場に反映させることで新たな知見を生み出すことを目的としている。特に、看護・医療の現場や看取りの前後におけるターミナルケア・デスエデュケーション・グリーンワーク/グリーンケアの実態を踏まえ、問題点を吸い上げ、そしてそれぞれの「ケア」の向上に人文科学が何を提唱できるのかを模索し、新たな視座を構築することを目指す。

3. 研究の方法

本研究は、デスエデュケーション・ターミナルケア・グリーンワーク/グリーンケアそれぞれの場面における「死」を、看護・医療の従事者と人文学の研究者間の連携をもって考察し、理解を深めることに主眼をおいている。そのため本研究の基礎は、看護・医療の現場とアカデミズムとの継続的コミュニケーションにあり、双方向の情報提供と提言が重要である。よって、研究期間を通じて、互いの意見交換を密に行う場を保持する

ことに留意した。同時に、各分担者が必要に応じた個別調査・研究を行い、その成果を常にフィードバックする方法をとる。看護・医療の現場でも、とりわけ、終末期医療に携わる機関や、看護師は、日常的に「死」に対峙し、また責任を持つ。そこで、本研究を、終末期医療を行っている医院、また、看護師への聞き取りを行い、以下のような手順を元に、その生の声を汲み取る場所から始めた。

(1)「死」の当事者に対する基本的問題点の洗い出し

デスエデュケーション・ターミナルケア・グリーンワーク/グリーンケア、それぞれの現場において、ケアされる患者や遺族に留まらず、「ケア」の従事者が向かい合っている「死」の問題について踏み込んだ論点整理を行う。「死」に直面している様々な当事者との個別インタビューや集団セッションを通して、当事者が抱える問題を明確にし、なにが求められているのかクリアにする。具体的なパートナーとして、仙台圏のナースおよび終末期医療の関係者、在宅介護の経験者、身近な人を最近失くした遺族を想定している。いわゆる異常死を大量にもたらした東日本大震災の犠牲者遺族については、時宜を見計らいながら、可能な範囲で接触した。

(2)人文学サイドの調査・資料収集

「死」に対する歴史的・文化的理解を増強するために、適宜、資料収集や事例調査を実施した。特に、欧米の諸理論に偏らず、むしろ日本を含めたアジア文化圏の慣習や価値観を対象に研究を進めることを心がけた。初年度は、日本国内、特に東北の事例から着手し、次年度以降、順次、対象地域を拡大し、各分担者の専門領域に寄った対象の資料・事例調査へとシフトした。

(3)人文学側と看護・医療側との意見交換の場の形成

平成27年度以降は、前年度からの「死」の当事者とのコミュニケーションを継続しつつ、そこから得られた知見や、人文学側の考察・議論の成果を報告し、さらに応答を得るための定期的な機会を設けた。「死に逝く身体」/「遺される身体」が歴史的文化的にどのように捉えられてきたかについての理解を、看護・医療側と研究者側とで交換することで、直接的には現代社会の価値意識とは異なる様相を示す様々な論点が、現代社会の現場を知る人々とどのように結びつけられ得るのかに留意しつつ検討した。

(4)成果の公開

研究の成果は、内部での交換に終始するのではなく、開かれた場において広く発信してゆく。具体的には、公開講演会(1回)・シンポジウム(2回)の開催を実現した。また、研究範囲にインド・中国を含んでいることから、日本に留まらず海外での研究報告、刊行物での発表などを代表者と一部の分担者が行った。

最終年度には研究全体の総括を行い、その成

果を報告書にまとめて、関係機関等に配布した。

4. 研究成果

本研究では二回の間接発表会を公開シンポジウムという形式で実施した。

第一回の公開シンポジウムは平成 27 年の 10 月 3 日に岡山大学津島キャンパスにおいて「死の受容の最前線」のテーマで開催した。当日は、以下に述べた二つの講演と四つの報告がなされ、それらの発表内容については『死の受容の最前線』の題名の予稿集として作成・配布された。

講演 1 「新再被災地から超高齢多死社会へ」
(鈴木岩弓)

講演 2 「在宅医療における臨床宗教師の実践」
(田中至道：臨床宗教師)

報告 1 「死の受容と施餓鬼聖典」(菊谷竜太)

報告 2 「祭文から弔辞へ」(高橋恭寛)

報告 3 「死体の処置(ケア)の今」(小田島建己)

報告 4 「死を看取り続ける看護師の悲嘆過程」(近藤真紀子)

第二回の公開シンポジウムは、翌平成 28 年の 6 月 25 日に、東北大学に置き「死の受容の最前線-死ぬまえ 死ぬとき 死んだあと-」のテーマで開催された。この時は、以下の 5 報告がなされ、前回同様、予稿集が配布された。

報告 1 「老いは『恥』か、『若きにまされる』か- 17 世紀日本における『老い』の諸相-」
(本村昌文)

報告 2 「余命 1 か月以内であった終末期がん患者の語りより」(大浦まり子)

報告 3 「初めて患者の死に遭遇した看護学生の経験」(近藤真美子)

報告 4 「死を見つめる～看取りの現場からの語り～」(工藤洋子)

報告 5 「在宅緩和ケアの看取りをめぐる動物たち-患者と家族もとの意味-」(相澤出)

二回目のシンポジウムの際のフロアとの討論に置き、看取りの現場における「死の受容」と「ケア」との関わりの中に、メンバーが装幀していなかった、医療と宗教の問題が未解明であることが明らかになった。この点を補うための時間が不足することが明らかになったため、無理なまとめを行わずに、まとめを翌年度に延ばすことを決め、その手続きに入った。

その後一年掛けて意見交換をする中で、これまでの成果の見直しも図られ、最終的に『現代日本における『死のケア』のための異分野融合研究』を刊行した。本書に収められたのは以下の論考である。

・「老いと死を見つめる」(本村昌文)

・「初めて患者の死に遭遇した看護学生の経験」(近藤真美子)

・「死を見つめる～看取りの現場からの語り～」(工藤洋子)

・「在宅緩和ケアの看取りをめぐる動物たち-

患者と家族にとっての意味-」(相澤出)

・「在宅医療における臨床宗教師の実践-超高齢多死社会に向けて-」(田中至道)

・言葉で<かたどる>哀しみ-追悼文の今昔-(高橋恭寛)

・「近代以降の死後の処理」(小田島建己)

・「死を看取り続ける看護師の悲嘆過程」(近藤真紀子)

・「二・五人称の死-“死者の記憶”のメカニズム-」(鈴木岩弓)

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 29 件)

(1) 鈴木岩弓、「死生観はいま」『歓喜世界』254、無、真如苑教学部、2018 年、pp.66-73

(2) 鈴木岩弓、「『宗教者』と『臨床宗教師』-公共空間における宗教の位置-」『熊本地震シンポジウム講演録 2016 東日本大震災から熊本地震へのバトン』、無、熊本大学拠点形成研究 A「紛争解決学・合意形成学の拠点形成」、2017 年、pp.118-128

(3) 相澤 出、「自宅での療養はなぜ中断されたのか-『みやぎ方式』の在宅緩和ケアを利用した在宅ホスピス遺族調査から-」、『島根大学社会福祉論集』6、無、2017 年、pp.33-44

(4) 相澤 出、「医療過疎地域における特別養護老人ホームの看取りのケア-宮城県登米市の地域密着型特別養護老人ホームの事例から-」『社会学研究』99、有、2017 年、pp.85-107

(5) 相澤 出、「医療過疎地域における特別養護老人ホームでの看取りをめぐる問題-宮城県登米市の地域密着型特別養護老人ホームの事例の検討-」『社会学年報』45、有、2017 年、pp.39-49

(6) 鈴木岩弓、「死者と生者の接点」『震災学』vol.9、有、東北学院大学、2016 年、pp.37-43

(7) 谷山洋三・得丸定子・奥井一幾・今井洋介・森田敬史・郷堀ヨゼフ・カール・ベッカー・高橋原・鈴木岩弓、「経文聴取により喪失悲嘆ストレスのケア」『仏教看護・ビハラー』第 11 号、有、仏教看護・ビハラー学会、2016 年、pp.151-165

(8) 相澤 出、「患者と家族のナラティブ(物語)を聞き取る-在宅緩和ケアの現場に社会学者-」『比較文化研究』26、有、2016 年、pp.35-48

(9) 小田島建己「畑道の上の墓-岩沼市西部に見られる諸事例に照射して-」『東北民俗』49、有、東北民俗の会、2015 年、pp.33-40

(10) 鈴木岩弓、「震災被災地における怪異の場」『口承文芸研究』第 38 号、有、日本口承文芸学会、2015 年、pp.28-41

(11) 鈴木岩弓、「宗教とこころのケア 被災地から超高齢多死社会へ」季刊『消防科学と情報』No.119、有、消防科学総合センター、2015 年、pp.27-30

(12) 鈴木岩弓、「警報音から始まったソーシャル・ムーブメント」『死の臨床』第 37 巻、日本死の臨床研究会、2015 年、pp.28-9

(13) 鈴木岩弓、「山上霊地の死者供養 大光院

のホトケヤマ』『東北民俗』第48輯、有、2014年、pp.49-56

〔学会発表〕(計43件)

- (1) 鈴木岩弓、「日本における『臨床宗教師』の誕生と展開」国立台湾大学醫學院附設醫院緩和医療病房講演会、2018年
- (2) 鈴木岩弓、「Moocからみた現代人の死生観」印度学宗教学会第57回学術大会、2017年
- (3) 相澤 出、「ムラの天神講から地域の天神講へ」日本宗教学会大会第76回学術大会、2017年
- (4) 高橋恭寛、「日本儒学研究の総括と展望-陽明学研究を中心に-」東日本国際大学東洋思想研究所現代儒学研究部会、2017年
- (5) 鈴木岩弓、「イエ亡き時代の葬送墓制」日本民俗学会9月例会、2016年
- (6) 本村昌文、「日本人の死生観に寄り添う医療とは」日本耳鼻咽喉科学会岡山県地方部会第248回耳鼻咽喉科集談会、2016年
- (7) 相澤 出、「ショートステイの活用から見える医療過疎地域における地域包括ケアシステムの生成-宮城県登米市の地域連携の事例から-」第62回東北社会学会大会、2016年
- (8) 菊谷竜太、「インド・チベット宗教における死兆と『転生次第』」第2回ネオ・ジェロントロジー研究会、2016年
- (9) 鈴木岩弓、「葬送墓制からみた現代日本人の死生観」北陸宗教文化学会、2015年
- (10) 鈴木岩弓、「被災地における死者の記憶」日本宗教学会第74回学術大会、2015年
- (11) 本村昌文、「江戸時代儒者の孟子受容について」北京日本学研究センター設立30周年記念国際シンポジウム、北京日本学研究センター、2015年
- (12) 鈴木岩弓、「震災被災地にみる死者と生者の接点」日本口承文芸学会第38回大会公開講演会、2014年
- (13) 鈴木岩弓、「『臨床宗教師』の社会実装-震災被災地から超高齢多死社会へ-」日本ホスピス在宅ケア研究会 in 神戸、2014年
- (14) 鈴木岩弓、「東日本大震災からの復興にみる民俗芸能の力」ASJI (Asosiasi Studi Jepang di Indonesia) National Symposium、2014年

〔図書〕(計10件)

- (1) 鈴木岩弓・森謙二、吉川弘文館、『イエ亡き時代の死者の行方』、2018年、pp.224[pp.1-9, pp.134-152]
- (2) 鈴木岩弓・小林隆、東北大学出版会、『柳田國男と東北大学』2018年、pp.296[pp.i-iv, pp.29-61]
- (3) 鈴木岩弓・磯前順一・佐藤弘夫、ペリカン社、『死者/生者論 傾聴・鎮魂・翻訳』2018年、pp.398[pp.1-4, pp.145-181]
- (4) 鈴木岩弓、勉誠社、安井眞奈美編『グリーフケアを身近に 大切な子どもを失った哀しみを抱いて』2018年、pp.68-78

- (5) 鈴木岩弓、山川出版社、月本昭男編『宗教の誕生-宗教の起源・古代の宗教-(宗教の世界史1)』2017年、pp.84-100
- (6) 鈴木岩弓、青史出版、『葬送儀礼と現代社会』、2017年、pp.85-139
- (7) 鈴木岩弓、ナカニシヤ書店、『他者論的転回 宗教と公共空間』2016年、pp.290-318
- (8) 本村昌文・植村友香、中野コロタイプ、『介護と看取りの文化史 教材集』、2016年、pp.120
- (9) 鈴木岩弓、ミネルヴァ書房、『はじめて学ぶ民俗学』2015年、pp.183-192
- (10) 国立歴史民俗博物館・山田慎也・鈴木岩弓編、東京大学出版会、『変容する死の文化 現代東アジアの葬送と墓制』、2014年、pp.230[pp.3-29, pp.223-226]

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)
取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 岩弓 (SUZUKI, Iwayumi)
東北大学・文学研究科・名誉教授
研究者番号: 50154521

(2) 研究分担者

本村 昌文 (MOTOMURA, Masahumi)
岡山大学・社会文化科学研究科・教授
研究者番号: 80322973
菊谷 竜太 (KIKUYA, Ryuta)
京都大学・白眉センター・特定准教授
研究者番号: 50526671

相澤 出 (AIZAWA, Izuru)

岩手保健医療大学・看護学部・主任研究員

研究者番号: 40712229

近田真美子 (KONDA, Mamiko)

福井医療大学・保健医療学部・准教授
研究者番号: 00453283

小田島建己 (ODAJIMA, Takemi)

東北大学・文学研究科・専門研究員
研究者番号: 50637296

高橋恭寛 (TAKAHASHI, Yasuhiro)

東日本国際大学・東洋思想研究所・博士研究員

研究者番号: 70708031

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者 なし